第Ⅲ章　調査経過と概要

薬師寺境内での発掘調査は，すでに戦前に行われている。昭和９年，西塔基壇上にあった文殊堂を移建するため，堂の礎石を掘りおこした際に和銅開珎，塑像片等が出土したことに端を発して[1]，日本古文化研究所による発掘調査が行われた。その後のものとしては，昭和29年に大岡実・村田治郎・福山敏男・浅野清氏等によって行われた南大門及び中門（Fig. 1「発掘調査位置図」番号１，以下番号のみ記す。）の発掘調査がある。この調査は，伽藍中軸線，南大門と六条大路との関係を明らかにすることを目的とした調査であり，何よりも薬師寺伽藍の全貌を明らかにする第一段階の調査であるので，すでに概要が報告されている[2]が，今回の調査報告に再録することとした。薬師寺伽藍の復興を目的とした最初の発掘調査は，講堂東北の位置に計画された宝蔵建設工事に伴う事前の発掘調査[3]であり，昭和40年１月から行われた。これ以後，数次にわたる発掘調査が行われることとなった。各調査の位置及び時期，面積等は Tab. 1，Fig. 4 を参照されたい。

宝蔵建設に伴う調査

さて，宝蔵建設に伴う事前調査は，伽藍北辺部の状況を把握することがまず必要とされたため，北口参道の東から東方に東西 120 m に及ぶ長いトレンチを設定して進めた。この地域は，伽藍全域の中で最も低い地点にあたる。調査地の西方では，整地土面において土壙数ヶ所・井戸４基を検出し，地山面で掘立柱建物跡を検出した。東方部は中世，おそらく室町以前にこの地域が泥土化した時期のあったことを想定させる瓦礫を含んだ腐蝕物の堆積が広範囲に認められ，奈良時代の遺構を検出することはできなかった。遺構の残存状況が良好でないことは，宝蔵建設候補地としては最適であるため，発掘範囲を拡張したが，土壙数ヶ所と中世以降の井戸２基を検出したにすぎず建物遺構はみられなかった。

東　回　廊

実質的な伽藍復興のための最初の調査は，昭和43年度に新たに結成された薬師寺発掘調査団が行なった東回廊の調査（第１次調査[4]）で，東塔の東に南北 3 m，東西 15 m のトレンチを設定することから始まった。ここでは川原石を用いた回廊西側の雨落溝を検出し，この溝の約 10 m 東で回廊基壇の凝灰岩羽目石の存在を確認した。この 10 m の間で，東西に並ぶ３ヶ所の礎石の抜取痕跡を見出し，東西回廊が複廊であることを知った。回廊が金堂，講堂いずれにとりつくかを知るために，金堂東方にＬ字形のトレンチを設定したが，回廊基壇痕跡は金堂にむけて西折することなく，さらに北にのびることを確認した。次に講堂東方に設定したトレンチでは回廊基壇の東北隅を示す遺構を検出し，あわせて講堂東南隅において回廊基壇の一部を検出し，回廊が講堂にとりつくものであることを確認したのである。

第２次調査

昭和44年度の調査は調査団第２次調査[5]で広範囲にわたるものであり，金堂・西塔・回廊・講堂・鐘楼・食堂等，６ヶ所の堂塔に及んだ。金堂は基壇の東半部を主体としてその外側をも対象とした。南面では凝灰岩の壇上積基壇が良好な状態で残っていた。葛石は取り除かれていたが，羽目石，地覆石が完存して，束石は用いられていなかった。羽目石の上半部は風触がいち

1）足立康「薬師寺伽藍の研究」『日本古文化研究所報告』５　1937年。

2）大岡実他「薬師寺南大門及び中門の発掘」『日本建築学会論文集』50　1955年 p. 142。

3・4・5）杉山信三他「薬師寺の最近の発掘調査」『仏教芸術』74　1970年 p. 85。

じるしく，部分的に火熱による赤変や黒色化がみられた。南面階段は，残存していた地覆石により，三ケ所あったことが確認された。階段は東面においても基壇中央にとりつく形でその痕跡を確認した。北面では，現基壇側石をとり除いて基壇内の調査をも行い，現基壇の内側約0.9m の位置で旧基壇外装の地覆石を検出した。このように現基壇が旧基壇より若干大きく改変された状況は東面においても旧雨落溝が現基壇側石の下から検出されたことによって確認された。西塔の調査は基壇西辺部で行われた。基壇の外側には整地埋土が堆積しており，埋土には，焼土や炭，多量の焼け瓦や若干の塑像片が混じっており，享禄年間の被災後の整理に関わるものとみられた。基壇端には部分的に地覆石を残すのみであったが地覆石の上には羽目石の痕跡のみ残っており，壇上積基壇ではあるが金堂と同様，束石をともなわないものであることが知られた。階段の痕跡は基壇中央部で検出した。基壇の外側には玉石が密に敷かれ，犬走り，雨落溝ともに幅 0.6m であった。玉石敷は雨落溝の外にも広がっていた。講堂と北面回廊では，北面回廊が講堂側面中央にとりつく状況，講堂東南隅の基壇，犬走り，玉石組み雨落溝等を検出した。いずれの地点でも焼土や炭を含む堆積土が遺構を覆っていた。北面回廊基壇上面は削平がいちじるしく礎石は残存せず，礎石を抜いたあとの根固め石を2ケ所検出した。昭和45年の調査成果と合わせると，当初の講堂基壇は東西約 43.5m，南北 22.5m となる。玉石敷犬走りは回廊の内側に面した部分にのみ設けられたようであり，幅約 1m の規模をもっていた。雨落溝は幅 0.45m である。当時は鐘楼の位置は明らかでなく，回廊内にあったとしたならば，金堂東北，講堂東南の位置がそれにふさわしいと考えられたため，トレンチを設定して調査を進めたが，何ら建物遺構を見出すことはできなかった。食堂の調査は，講堂の北方20m の位置に東西，南北にトレンチを設定して行なった。この地域は，開田時の削平がいちじるしく，食堂跡としての遺構は認められなかった。しかし，薬師寺境内として削平されずに残った部分の断面に南北幅 20m 以上の基壇版築土を認めた。時間の関係からこの部分の調査は次年度に残すこととなった。

第3次調査

調査団による第3次調査[6]は，講堂北辺と食堂南辺で行われた。講堂北面のほぼ中央部に設定した南北トレンチでは何層かの整地土の下から講堂基壇にとりつく階段の痕跡，そして階段から北へ伸びる川原石を敷いた参道を検出した。一方，第二次調査で食堂推定地において基壇積土と思われる推積土を検出しているので，その西方の延長線上で，石敷参道の北方にトレンチを設定した。食堂の基壇土は断面で観察するほど明確ではなかったが，凝灰岩地覆石を検出することができ，食堂の南辺位置を明らかにし得た。また，この部分において南面中央階段の張り出し，雨落溝，そして南に伸びる川原石敷参道をも検出することができた。

第4次調査

調査団の第4次調査[7]は，食堂の規模をあきらかにすることを第一の目的としたものである。『縁起』に記載された東西140尺の寸法から東南隅と西北隅の推定位置にトレンチを設定して調査を進めたところ，西北のトレンチでは凝灰岩痕跡，玉石の抜取り痕跡等から基壇の西面を確認し，完全に玉石の残る北面基壇の雨落溝を検出することができた。東南隅では状況が必ずしも良好でなかったが，原位置を保つ凝灰岩を検出し，東西 47.2m，南北 21.7m という基壇規模を明らかにすることができた。食堂跡の調査を進める一方，経蔵の遺構を求めるべく食堂跡東方約 20m の位置に南北約 42m，幅 3m のトレンチを設定した。回廊の北約 30m の位置で幅約 16m の基壇積土を認めた。経蔵基壇を検出したかと考えたが，基壇南辺で調査を進めた

6・7・8）杉山信三「薬師寺の建築　発掘調査を通して」『薬師寺』毎日新聞社　1971年。p. 147。

ところ，この基壇が東西 40m をこえる規模であることがわかった。さらにこの基壇の東西両端で発掘区を拡張して礎石，その抜取痕跡等を検出し，いくつかの間仕切りが為されていることが確認できた。したがって経蔵を求める作業を進めながら，はからずも僧房を発見することとなったのである。

第5次調査　昭和46年度の第5次調査[8]は，経蔵の位置を確認することが主たる目的で，7月から行なった。東西回廊の延長線上で北回廊と僧房との間にトレンチを設定したところ南北約 19m の規模で基壇土を検出し，南北両端には凝灰岩地覆石の痕跡を認めた。『縁起』に記された建物規模に比べ大きな基壇となるが，検出した基壇の東西長が約 12m あり，建物規模との比率がほぼ等しいので，これを経蔵と考えた。今次の調査には，近鉄橿原線軌道沿いに奈良市が行った下水道工事に伴う事前調査が含まれている。ここでは限られた調査範囲ではあったが，南北に連なる基壇遺構とこれに伴う石組暗渠を検出した。西面回廊に近接した位置での築地跡の検出は，伽藍中軸線を対称にして東側の位置での遺構の存在を予想させるものであったので東面回廊跡の外側で，東院の北約 28m の位置で調査を行ったところ，ちょうど対称の位置に東西幅約 6m の基壇痕跡を認めた。これらの遺構は，『縁起』に記す東院及び西院を区画する築地あるいは回廊跡と考えられた。

金堂跡　伽藍復興工事が開始され，創建当初の大理石製仏壇ともども天文14年（1545）に再建された金堂解体徹去後，基壇及び基壇まわりの発掘調査を昭和46年11月と12月に行なった[9]。今次の調査から，薬師寺の委嘱を受けて薬師寺伽藍発掘調査委員会の指導のもとに奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が行うこととなった。発掘に先だちクレーン車を用いて現基壇を写真測量をした。現基壇は江戸時代に拡大修造されているため，それらの施設を除去し，さらに旧基壇周囲の積土，堆積土を排除して，当初の裳階礎石，羽目石，地覆石，雨落溝などを除去した。基壇築成にあたっては掘込み地業は行わず，旧地表上に砂質土と粘土を交互につき固めている。礎石は身舎，梁行，側柱筋で2個抜き取られていたが，花崗岩で，大部分のものに焼けた痕跡があった。礎石の据付けは，基壇土を途中まで積上げた後に据付け穴を掘って礎石を据え，再び土をつき固めて基壇を築きあげている。根石はみられなかった。裳階の礎石は花崗岩製で現側柱礎石の直下にかなり沈下しながらもすべて残存していた。据付け掘形は，基壇上面から掘りこまれている。これも根石は使われていない。地覆石は凝灰岩製でほぼ全周囲に完存していた。延石はない。羽目石は凝灰岩製でよく残っており，とくに南面は完形のまま残っていた。束石は用いていない。羽目石の上半部は強い火熱を受けて変色している。基壇まわりの堆積土から多量の遺物が出土した。ほとんどが屋瓦であるが，土器，金属製品，脱乾漆仏断片などもある。瓦の大部分は鎌倉時代以降のものである。金属製品には葡萄唐草文の飾金具や蓮弁を毛彫りしたナスビ形の鈴などがある。

西僧房跡　金堂復興工事進行中の昭和49年，僧房復興計画が実施段階に入り，これに伴う事前発掘調査が10月から12月まで行われた[10]。今次の調査は食堂西側に想定される西僧房について行い，大房・小子房の一部，両房の間にある付属屋及び石溝で画された空地を検出した。大房北側は中世の溝によってかなり破壊されていたが，大房は厚く焼土に覆われており保存は良好であった。基壇は径 20cm 程の玉石を一列に並べた低いもので，大房・付属屋・小子房がともに同一

9）奈文研『年報』1972年 p. 42。

10）奈文研『年報』1975年 p. 28。
平城宮『概報』昭和49年度 p. 37。

基壇上に建設されている。基壇をめぐる雨落溝は素掘りである。大房は食堂と棟心をそろえた東西棟であり，西方は近鉄軌道にかかるが，第1房から第7房までの間仕切りを明らかにすることができた。房境や各室の境は瓦を敷き並べた地覆が敷かれており，地覆上に厚さ15cmの焼けた土壁が遺存しているところもあった。各房内は一様ではなく，土間のもの，床張りの痕跡をもつものもあり，使い方に差がみられた。また，房によっては火災に罹うまでに何らかの改修の行われている痕跡をとどめるものもあった。今次の調査で注目すべきものは，大房と小子房との間が単なる通路ではなく，間仕切りをもつ部屋としての使用が考えられる。『縁起』によると，僧房は天禄4年（973）に焼失し，一部は再建されたとしているが検出した遺構からみて，今回の調査部分での再建は行われなかったことが明らかになった。出土遺物からもこのことは裏づけられ大きな成果を得ることとなった。西僧房跡出土の土器類は，とくに僧房の床面から出土したものが多く中には中国製磁器も含まれている。このうち大多数を占めるものは土師器，黒色土器の椀，皿類で，これに少量の灰釉陶器が加わって，日用什器を構成していることが明らかになったことは土器編年の面と合わせて今回の大きな成果であった。

今次の調査では，西僧房の他に食堂・鐘楼・西回廊などを含む地域と現本房の北方の地域を合わせて行なった。食堂跡は昭和45年の調査で位置，基壇規模，正面階段及び基壇周囲の状況が明らかになっている。今回は西端部分を発掘し，北面と西面の基壇地覆石，玉石敷きの犬走り，雨落溝及び建物の西側柱列を検出した。鐘楼跡は，昭和46年に実施した経蔵跡と対称の位置で検出した。基壇上面は削平がいちじるしいため，礎石据付け痕跡などは失われ，柱位置は不明である。しかし基壇まわりの地覆石の抜取痕跡，西面・北面に凝灰岩製の石階を残していたために基壇の規模を復原し，建物の平面を推定することができた。それは経蔵の調査で得た数値と一致し，経蔵・鐘楼ともに軒の出の深い構造であった可能性と，金堂や両塔と同様に裳階付の可能性が考えられた。本坊北方地区では，現在の本坊の北約 25m のところに幅 3m，長さ30mの東西トレンチを2本設定して行なった。この地域を『縁起』引用の「流記」の記載から倉垣院などに比定する考えもあるが，発掘調査では中世及び近世の土壙，溝，井戸，小穴等を検出したにとどまり，奈良時代にさかのぼる遺構を検出できなかった。

食堂跡

鐘楼跡

伽藍の復興工事も進み，整備が行われるようになった。こうした工事に伴う事前調査として昭和50年度には食堂北方，北門西南方，八幡院地区の調査を行なった[11]。食堂北方の調査は北口参道をへだてた東側にあたり，食堂基壇北辺から約 30m 北方の地点である。ここで重複した掘立柱建物2棟を検出したが，いずれも奈良時代の遺構である。薬師寺境内で奈良時代の掘立柱建物を検出したのは今次の調査が初めてであり，その位置が食堂北方であることから，大炊屋などに関係する建物と推測された。八幡院地区は，厳密な意味では薬師寺伽藍内ではないが，調査地は現在の薬師寺八幡宮北側であり，六条大路南側溝を検出したので今回報告した。なお，北門西南方地域は調査面積が小さく，また後世の破壊が著しく斜行溝を検出したにとどまった。

掘立柱建物

金堂及び西僧房の復興後，薬師寺では西塔復興計画がたてられた[12]。このため，西塔創建時の遺構を明らかにする必要が生じ昭和51年度に発掘調査を行なった。西塔跡の発掘調査は，すで

西塔跡

11）奈文研『年報』1976年 p. 33。
平城宮『概報』昭和50年度 p. 17。

12）奈文研『年報』1977年 p. 35。
平城宮『概報』昭和51年度 p. 30。

に記したように昭和9年と同44年に部分的な調査が行われているが，今回全面的な調査を実施した。まず基壇面の調査を行い基壇上に残る方形柱座をもつ2個の当初の礎石が原位置を動いて享禄の火災時の焼土上に据えられていること，心礎は原位置を保っていることを確認した。さらに四天柱と側柱の掘形をすべて検出した。裳階柱の礎石据付け痕跡は検出できなかったが，これは掘形が浅かったためと考えられた。基壇回りに堆積した焼土を排除したところ，基壇外装部は花崗岩製地覆石と凝灰岩製羽目石とがわずかに遺存しているだけであることが明らかとなった。階段は基壇の四方に設けられていた。基壇回りの犬走り，雨落溝の状況は昭和44年の調査の項で述べたとおりである。雨落溝の外に広がる石敷は発掘区外へさらに続き，回廊内全域が玉石敷と考えられたが，基壇縁から3.5mほどのところは一列に立石を並べ，塔を中心とする一辺 20.7m ほどの正方形の区画を構成していた状況が知られた。基壇上面の焼土層からは焼け崩れた塑像片多量が出土した。

十字廊　伽藍の整備も進んできた昭和52年度には，西僧房小子房の未調査部分と，十字廊推定地域の調査を行なった[13]。小子房は一部で後世の破壊を受けていたが，発掘区の東北側は焼土・木炭が

番号	調査年度	調査地区	調査期間	調査面積	調査主体
1	昭和29 (1954)	南大門・中門・南面大垣	29. 8.27～ 9.27	405 m²	科学研究費(代表者浅野清)
2	39 (1964)	宝蔵建設予定地	40. 1.11～ 3. 6	1025	奈文研
3	43 (1968)	講堂・東回廊	43. 7.16～ 8.31	475	調査団
4	44 (1969)	金堂・講堂・西塔・回廊・食堂・金堂東北方　講堂・食堂間参道	44. 7. 1～ 8. 6 45. 3.16～ 3.28	579	調査団 科学研究費（代表者杉山信三）
5	45 (1970)	食堂・東僧房	45. 7. 8～ 8. 6	989	調査団
6	46 (1971)	講堂・回廊・経蔵・東院・西院・金堂	46. 7.14～ 8.14 46.11. 8～12.27	474 813	調査団 奈文研（以下同じ）
7	49 (1974)	鐘楼・西回廊・食堂 西僧房・本坊北	49.10. 7～12.26	1428	
8	50 (1975)	燈楼跡 食堂北方 東院堂北方（八幡院，六条大路南側溝） 北門地区	50. 9.10～10. 1 51. 3.25～ 4. 2 50. 9.25～ 9.29	8 193 120 27	
9	51 (1976)	西塔・東院堂西側	51. 7. 5～ 8.25	564	
10	52 (1977)	東僧房北方 西小子房・十字楼	52.11.14～11.26 53. 1. 7～ 4. 6	120 749	
11	53 (1978)	宝積院跡	53.12.11～12.25	90	
12	54 (1979)	東僧房 西面大垣	54. 8. 6～10. 5 55. 1.31～ 2. 4	900 25	
13	55 (1980)	西面大垣	55.10. 1～10.27	88	
14	55 (1980)	西院	55. 7.21～ 8. 4	96.5	
15	56 (1981)	西面大垣	56. 5. 6	7.6	
16	56 (1981)	南門付近	57. 1.21～ 2.23	116	
17	57 (1982)	中門	57. 8.23～10. 4	670	
18	58 (1983)	平城京右京六条二坊九・十坪 （旧境内）	58. 5.24～ 6. 2	198	
19	58 (1983)	同上	58.12.12～59.2.8	1960	
20	60 (1985)	回廊	60. 1.16～ 4.27	1000	

Tab. 1　発掘調査地一覧表

13）奈文研『年報』1978年 p. 29。

Fig. 4　発掘調査位置図

厚く堆積し，遺構の保存状態は良好で，古代の僧房研究に大きく寄与することとなった。小子房の東に設定したトレンチでは十字廊の存在を確認した。調査範囲は遺構の西半部のみであったが，『縁起』に記す十字廊の規模にほぼ一致する。薬師寺に関して学界の永年の懸案であった十字廊の位置，規模が明らかになったこともこれまた大きな成果といえるだろう。この年，東僧房跡の北，現売札所東側への摩利支天堂移築に伴う調査を行なった[14]。調査面積が狭隘であるわりには遺構の密度が濃く掘立柱建物２棟分，井戸４基を検出した。平面形式はわからないが，いずれも東西棟であり奈良時代に属する。井戸は１基が奈良時代で，３基が平安時代末期に属する。出土遺物も多く，とくに奈良時代の井土埋土から木簡が233点出土したことは注目をひくものであった。その中に「霊亀二年」銘をもつものがあり，造営に関わるものかと考えられた。

東僧房　さきに復興工事を行なった西僧房に引き続き，東僧房の復興が計画され，工事に先立つ昭和54年８月に発掘調査を実施した[15]。すでに昭和45年調査団によって一部調査が行われ，基壇南辺の全長や，第１房が明らかにされている。今次は，第９房までの全面発掘を行なった。遺構の遺存状況は第１・２房は良好であったが，第３房以東はきわめて悪く，礎石はすべて抜きとられていた。基壇面は赤く焼けており，火災に罹って廃絶したことを示している。灰面から出土した土器が10世紀後半頃なので，その火災は西僧房と同様，天禄４年（973）の火災で焼失したものと考えられ，その後再建されなかったことが確認された。

以上の多くの発掘調査のほか，昭和53年度には薬師寺北門に近接した地域，また奈良時代に苑院があったと推定され，17世紀中頃に宝積院が建てられた地域の調査[16]，そして昭和54・55年度には西面大垣にかかる地点での民家新築工事に伴う事前調査を行なっている[17]。前者では，宝積院の門基壇の一部と考えられる遺構，中近世の土壙・溝・井戸のほか奈良時代の南北に連なる小規模な掘立柱塀を検出したにとどまり，北面大垣は検出できなかった。後者の２度の調査では，創建当初の大垣基壇を検出している。

中門　昭和56年度には南門両脇で小発掘区を設け，東側では南門棟通りの柱位置で礎石抜き取り穴を検出し，西側は妻側中央柱の根石を検出した。隅木蓋瓦が出土している[18]。昭和57年８月～10月には，中門再建に先立って中門跡を調査し，昭和29年発掘調査の成果を確認し，加えて中門に関する貴重な成果を得た[19]。西側柱通りを除く礎石抜取穴15ヶ所を検出し中門平面が確定した。基壇化粧を南・東で検出したことや，南北雨落溝を検出して基壇規模を確定した。中門東西両端間の南側で二王像台座石を検出して二王像の位置が決まったことなどである。

回廊　昭和58年には伽藍北方で２ヶ所発掘し，江戸時代の子院の様相が一部明らかになった。昭和59年度には回廊三地区を発掘し奈良時代複廊建設に先立つ単廊建築計画があったことが判明し，薬師寺伽藍創建当初の造営事情に興味深い成果を提供した[20]。従来の複廊の柱礎石抜取穴の間に単廊礎石抜取穴を検出し，単廊用に造成した基壇を両側に拡幅して複廊基壇を築いている。回廊基壇外装は地覆をおかず羽目石を立ち上げて葛石を置く簡単なものである。

14）奈文研『年報』1978年 p. 31。
15）奈文研『年報』1980年 p. 34。『概報』昭和54年度 p. 38。
16）『概報』53年度 p. 39。
17）奈文研『年報』1980年 p. 35。『概報』昭和55年度 p. 45。
18）奈文研『年報』1981 p. 27。平城宮『概報』56年度 p. 60。
19）奈文研『年報』1982 p. 43。平城宮『概報』57年度 p. 65。
20）奈文研『年報』1984 p. 32。平城宮『概報』59年度 p. 60。